

川のそばで歌う 詩篇 137:1-9

2023. 1. 22、丘の上 NO. 694
春日部福音自由教会 山田豊

本詩篇は、バビロン捕囚後、故郷エルサレムに着いた詩人が歌ったものと思われます。捕囚となっていたころ受けた屈辱、神殿での礼拝ができなかったことなど、かつては川辺で涙したことを思い起こして、この詩篇を歌ったのです。

その涙の理由の一つが、余興としてシオンの歌を歌え、と言われたことです(2-4)。神殿での礼拝で歌う讚美歌を、酒の席の余興として歌えというわけですから、礼拝の民であるユダヤ人にとって、これは神に対するまことに無礼なことでした。また、そこに歌われている言葉尻を捕らえて、神が愛であり力ある方なのなら、どうしてお前たちは今ここで苦しみを受けているのか、そんな神などいないのだ、という嘲りでもあったのです。それゆえ歌うことを拒否し、豎琴を柳の木の枝にかけてしまったのです。

しかし彼らは、故郷であり、礼拝の場所であるエルサレムを忘れることはありませんでした(5-6)。異国の地にありながらもユダヤ人が生き延びることができたのは、神を忘れない、苦しい時ほど神を信頼する信仰の故でした。しかし、実は、神の方が彼らを忘れることなどなかったのです。母の胎内にいるときから神はわたしたちを見られ、すべてを知っておられるのです。このことは、詩篇 139 篇で学びたいと思います。

また、エルサレムが荒らされたときにひどい仕打ちをした、エドムの子孫たちに復讐してくれるよう願っています(7-9)。彼らは、エルサレムを略奪し、そこからの避難者を殺したのです。まさに、律法に記されているように、「目には目を、歯に歯を、いのちには命を」ということの実践です(出エ 21:24、レビ 24:20)。しかし、この律法を超える言葉をイエスは言われました。「『目には目で、歯には歯で』と言われたのを、あなたがたは聞いています。39 しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。』(マタイ 5:38-39)

このイエスが再び来られるとき、天と地は新しくされ、新しい神の都が神の元から下ってきます。そこには命の川が流れており、岸边には月ごとに12種の実がなる木が植えられているのです。私たちはやがてそこで、新しい歌を歌い、神を礼拝するようになるのです。

今涙に暮れていても、その涙がぬぐわれ、主の歌を心から賛美することができる日がやってきます。ここに、キリスト者の希望があります。その日まで、地上での苦しみがあっても、私たちが覚えてくださっている神に信頼して、今日という一日を過ごしてまいりましょう。

引用聖句

詩篇 139:1, 16 【主】よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。16 あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。

オバデヤ 10-11 あなたの兄弟、ヤコブへの暴虐のために、恥があなたをおおい、あなたは永遠に絶やされる。11 他国人がエルサレムの財宝を奪い去り、外国人がその門に押し入り、エルサレムをくじ引きにして取った日、あなたもまた彼らのうちのひとりのように、知らぬ顔で立っていた。

エゼキエル 25:11-12 11 わたしがモアブにさばきを下すとき、彼らは、わたしが【主】であることを知ろう。12 神である主はこう仰せられる。エドムはユダの家に復讐を企て、罪を犯し続け、復讐をした。

民数 20:20-21 しかし、エドムは、「通ってはならない」と言って、強力な大軍勢を率いて彼らを迎え撃つために出て来た。21 こうして、エドムはイスラエルにその領土を通らせようとしなかったので、イスラエルは彼の所から方向を変えて去った。

レビ 24:20-21 骨折には骨折。目には目。歯には歯。人に傷を負わせたように人は自分もそうされなければならない。21 動物を打ち殺す者は償いをしなければならず、人を打ち殺す者は殺されなければならない。

出エ 21:24-25 目には目。歯には歯。手には手。足には足。25 やけどにはやけど。傷には傷。打ち傷には打ち傷。

申命記 19:21 あわれみをかけてはならない。いのちにはいのち、目には目、歯には歯、手には手、足には足。

マタイ 5:38-39 『目には目で、歯には歯で』と言われたのを、あなたがたは聞いています。39 しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。

レビ 23:40 最初の日、あなたがたは自分たちのために、美しい木の実、なつめやしの葉と茂り合った木の大枝、また川縁の柳を取り、七日間、あなたがたの神、【主】の前で喜ぶ。

ヨブ 40:22 はすはその陰で、これをおおい、川の柳はこれを囲む。

黙示 22:1 御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、2 都の大通りの中央を流れていた。

黙示 22:2 川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。

■『世界ふれあい街歩き「ウクライナ キエフ 特別版」』

NHK BS プレミアムで、2022年8月11日（木）に放送された。これは、2019年、戦禍前のウクライナのキーウ（キエフ）を歩いた番組の再放送に現在の様子を加えた特別版。大聖堂など、黄金ドームが輝く美しい町並みで知られる古都キーウ。大地の豊かな実りに恵まれ、古き良き伝統が受け継がれるウクライナだが、1991年に旧ソビエトから独立した後も、欧米とロシアのはざままで揺れ続けている。激動の時代の中、平和を切に願う人たちと出会う。特別版の最後には、当時の出演者イッセー尾形が登場し、ロシア侵攻後の変化、出会った人たちの近況をつたえた。その中に、2019年の放送で、ウクライナの伝統楽器パンドウールを奏でていた男性が再登場している。彼は、ロシア軍の侵攻後、国家防衛隊に入り国を守るために戦う、と言っていた。今彼は、どこで何をしているのか？川のほとりで、美しかったキーウの街を思い起こして涙しているかもしれない。イッセー尾形が言ったように「どうかご無事で」と祈らずにはおれない。

結び柳

初釜の床飾り。柳の枝をたわめ曲げて輪に結び、床の柳釘などに掛けた青竹などの花入から長く垂らしたもの。

柳という植物は、日本では夏の幽霊などとともに登場する植物ですが、中国では農書『齊民要術』に「正月旦、取楊柳枝著戸上、百鬼不入家」（正月の朝、楊柳の枝を戸口に挿しておけば、百鬼が家に入らない）という記述もあるような縁起物だそうです。

また縮柳（わんりゅう）とも呼ばれるこの「結ぶ」ということについて、「縮（わん）」とは曲げて輪にするという意味があります。柳の枝はしなやかでよく曲がるので輪にし、無事に回転して帰ってこれるように旅中の平安を祈る意味もあるそうです。

昔の中国では人と別れるとき、送る者と送られる者が、双方柳の枝を持って、柳の枝と枝を結び合わせて別れる風習があり、その風習を千利休が送別の花として「鶴一声胡銅鶴首花瓶（つるのひとこえこどうつるくびかへい）」に柳を結んで入れたのが、茶席で用いられた最初ではないかといわれています。（埼玉県立新座高校）

表千家初釜の軸

「春入千林処々鶯（はるいるせんりんしょしょにうぐいす）」

中村哲氏

たいていの樹木は水に浸かり続けると死ぬ。湿地に木が生えないのは

そのためだ。柳は不思議な木で、水腐れを起こさず、むしろ水辺で元気がよい。流水からも酸素を取り込む水草のような性質があるからだ。初夏、柳の根方を見ると、岸辺から張り出す毛根が観察される（写真1）。まるで赤い毛氈（もうせん）のように、鮮やかだ。古くから岸辺の保護に用いられ、日本でも「川端やなぎ」は馴染み深い。